

「人」と「自然」が繋ぐ 鹿児島県の未来

FLP松田ゼミ
取材合宿リポート

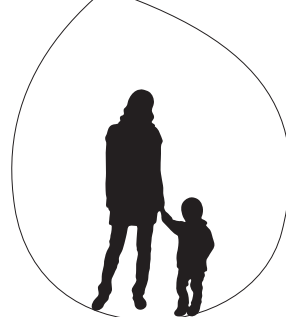
第2弾

人々が向き合う、鹿児島県の魅力と課題とは。
FLP松田ゼミ取材合宿リポート第2弾です。



Report 1

持続可能な自治集落を目指して



資料を手に、熱心にお話して下さる豊重哲郎さん

丹野ひとみ

商学部
3年

柳谷集落は、鹿児島県鹿屋市串良町にある全住民約300人の小さな集落だ。

この集落は、地元の方に「やねだん」という愛称で親しまれている。やねだんで22年間、自治公民館長を務めているのが、豊重哲郎さん。

取材に伺った際、ちょうど通りかかった若い住民の方に、「お疲れさまー！」と元気よく声をかけていたのが印象的だった。

豊重さんが自治公民館長に就任した当時の集落の余剰金は1万円と



好気性微生物をつくらしている土着菌センター

でも住民自治ができるような状況ではなかった。

それが今では、村づくり・町づくりの極意を学ぶために全国から多くの人が集まる“地域再生の模範”ともいえる集落へと成長した。

豊重さんがどのような信念をもって、やねだんを誇り高き自治集落に変えていったのか、お話を聞いた。

●リーダーは 引き立て役

自治公民館長に就任した豊重さんは、ひらめきと企画力により様々な地域再生の提案を実行してきた。

まず、放置され荒れ放題だった耕作地を地元の高校生たちと一から耕しサツマイモ畑の再生に成功。さらに好気性微生物を製造し、その土着菌を肥料として畑にまき、無農薬としてのサツマイモを育て、「やねだん」と銘打った芋焼酎をブランド品として

売り出した。

その結果、集落の財源は大幅に増加し、住民に1万円のボーナスを支給するまでになった。

22年もの間、やねだんの地域再生を一手に請け負ってきた豊重さんが、意識していることは何か？

「リーダーは何かを教えたり、命令したりするのではなく、相手の立場になってその人の才能を分析し、いいタイミングで引き出してあげること。そして、リーダー自身は磁石に引き付けられるような人間力を身につけなければならない」

●子どもたちに 魅力ある体験を

取材の中で豊重さんが最も熱く語ってくださったのは、やねだんで暮らす子どもたちに対する活動だ。「将来、子どもたちが、進学や就職のために県外に出ていっても、結婚生活を

送るなら義理人情溢れるやねだんに戻って子育てしたい、と思えるような地域をつくりたい」と、豊重さんは語る。

そして、その子どもたちがやねだんに戻ってきたときのために、どんな地域づくりをしないといけないのか、ということを常にテーマとして掲げている。

2018年夏は、公民館で寺子屋と集団のピアノ教室を開いた。ピアノ教室を開いたのは、音楽に興味のない子どもたちが、夏休み期間だけでもピアノに触れることで音楽に興味を持てれば、もっと集落に活気ができるのでは、と考えたからだ。

豊重さんにとって、やねだんの子どもたちはみなファミリーだ。子どもたちにいろいろな体験を提供し、感動を与えることもまた、大きな町おこしにつながる。

「魅力ある体験を、高校生までの間に体験させてあげれば、子どもたちはいつかUターンしたいと思うはず。そういう意味で、地域が持続していくためにはお金よりも人が大事」

●地域創生を 次の世代に つなげていくために

地域再生というテーマは、とても難しい。

全国でこれまで何十年も地域の生き残りをかけて、様々な施策が打ち出されてきているものの、そのほとんど

どが一過性の盛り上がりで終わってしまい、持続しないというのが現状だ。

若者が地方から都会へ流出し、東京の一極集中と地方の衰退がますます進んでいく中で、やねだんのように住民の力だけで財源を確保できるようになり、何より住民全体が自分たちの集落を活気づけたいという意識を持っている地域は、なかなか

いだろう。

「20年やってきて、地域再生だけではだめ。創生を目指さなければ。そのために行政に頼らず自主財源を確保し、それをいかに還元していくか。還元次第で人は動く」

豊重さんに続く、次のリーダーはすでに決まっています、その方を中心に新しい取り組みも始めている。次

の世代にバトンをつなぎ、地域創生を持続させていくことが次の大きな課題だ。

これから社会に出ていく私たちが、地域再生・創生についてもっと考え、少しでも行動し貢献していきたい。それが日本全体の活力に繋がるはずだ。



平田有紀
法学部
3年

Report2

かごしま茶のプライド 愛されるお茶を目指して

かごしま茶のポスター



『かごしま茶は緑が旨い。』
鹿児島県茶業会議所が提唱する、かごしま茶のキャッチコピーだ。

鹿児島県は仕上げ加工前の荒茶の生産量が26,600トン(平成29年度)で、静岡県に次ぐ全国2位。

しかし、これらの一部は仕上げ過程で静岡茶や京都産の宇治茶にブランドされるため、名前が知られず、ブランド力の弱さが課題であった。

100%鹿児島県産のお茶の消費を拡大するため、県は県内各産地の銘柄を「かごしま茶」と総称して、ブランド確立に取り組んでいる。

温暖な気候の鹿児島では、年間を通して多くの品種のお茶を生産。近年お茶は嗜好品として楽しまれる傾向が強く、多様な味のニーズに応えることもできる。

独自の栽培方法も特徴の一つ。かごしま茶は、茶摘み前に黒いネットを被せることで深みのある濃い緑色になり、甘みと渋みの調和がとれたコクのある風味が引き出される。まさに「緑が旨い」お茶となるのだ。

「お茶といえば静岡県」というイメージを持つ人は未だ多い。今回、かごしま茶の魅力をさらに広めようと県



創作御膳の前菜



茶業の第一線で奮闘する方々を取材した。

●かごしま茶の魅力を伝える

私たちが家でお茶を入れる際、ポットから沸騰したお湯を注いで飲むことが多いのではないだろうか。

鹿児島県茶業会議所事務局ではその飲み方を「もったいない」と話す。100度に沸騰したお湯で入れたお茶よりも、70～80度に冷ましたお湯で入れた方が深い甘みが生まれ、全く違う味になるという。

茶業会議所では、子どものうちからその味の繊細さに親しんでもらうため、県内外の小学生を対象にお茶の入れ方教室を行っている。

実施後には「お湯の温度でこんなに味が変わるなんて知らなかった」という感想のほか、「初めて急須に触った」「家に帰って、お母さんにお茶を入れてあげたら喜んでくれた」など、活動の成果を実感できる声が多く寄せられた。

大学生もかごしま茶の振興に力を注いでいる。イベントに出演して、かごしま茶をPRする「かごしまChaガー

ル”の大学生は、「私と同世代の人たちは、ペットボトルのお茶を買うことはあっても、自分から急須でお茶を入れることは少ない。かごしま茶の美味しさ・良さを多くの人に伝えて、かごしま茶を好きになってもらいたい」と問題意識を語る。

●食べるお茶心を豊かに

大隅半島の付け根に位置する志布志市に、株式会社和香園が経営するレストラン「茶音^{さおん}の蔵」がある。

ここでは「食べるお茶」として、お茶の繊細な味を創作御膳で楽しむことができる。

「お茶といえば静岡ではなく、鹿児島といわれるように」と熱く話すのは、和香園社長の堀口大輔さんだ。

先代社長が始めたこのレストランは、2018年で開業3年目に突入。

自社で生産・加工したお茶を、すべてのメニューに何らかの形で用いている。例えば、粗びき茶が入ったノンアルコールビール、ほうじ茶を混ぜた味噌、茶殻を食べて育った豚など使用方法は様々だ。

季節によってメニューを変えてリピーターを増やし、継続的にかごしま茶の魅力を発信することに成功して

いる。

また、食材の地産地消や使用する器のデザイン、店内の雰囲気づくりにもこだわりを見せる。食事をしながらゆったりとしたジャズを聴き、窓からは青々とした茶畑が一望できる。

堀口さんは「心休まる環境で和の料理を食べてもらうことで、気持ちに余裕ができる。心が豊かになる」と語る。

●国内外問わず愛されるお茶へ

中国やベトナムなど、お茶の競合国との競争を勝ち抜くために、鹿児島県は積極的に海外のバイヤーとの商談に取り組んでいる。

平成29年度のかごしま茶の輸出額は約2億円。現在の主な取引先は



和香園社長の堀口大輔さん

米国だが、今後さらに取引国を増やしていくことも検討中だ。海外での和食ブームと合わせて販路を拡大するには、今がベストなタイミングだろう。

海外では、日本茶の魅力の一つとして健康への効能が注目されてきた。しかし堀口さんは、「健康面に関しては、同じことが外国産のお茶でも言えるようになる」と話す。

そこで、健康以外の面での差別化

が求められている。さらに、各国で使用可能な農薬の登録基準が異なるため、それを相手国と合致させることも必要だ。

相手国の基準に合わなければ、どれだけ質の高いお茶を作っても輸出はできない。鹿児島県に限らず、日本茶業界全体に当てはまる今後の課題だ。

「静岡茶や宇治茶に負けないブラ

ンド力を持つ。かごしま茶の上質かつ繊細な味を広める」。鹿児島県の茶業に携わる方々に共通する思いだ。

国内外問わず愛されるお茶を目指して、かごしま茶の躍進は今後も続くに違いない。まずは私たちも、歴史あるお茶の文化に触れてみてはどうか。

少し冷めたお湯で入れたお茶は、ペットボトルでは味わうことができない日本の伝統の味がするはずだ。



Report3

人材育成と 広がるビジネス



吉田香織

経済学部
4年

学びに年齢制限はない。鹿児島県曾於市、森をぬけた先に大人が通う学校がある。

閉校となった中学校校舎が、再就職を目的とした職業訓練施設「たからべ森の学校」へと生まれ変わった。ここでは農業の人材育成に力を入れている。農業の訓練学校は全国でも珍しくないが、再就職に必要なPCスキルや就職支援まで手掛けるのが、たからべ森の学校の強みである。

近年、人手不足に悩まされる企業が後を絶たない。本来、人手不足で

あれば訓練生も減少するはずである。しかし、定員15人に対し、毎年23～24人にもものぼる応募があるという。

自身もホームページ制作の職業訓練に4カ月間通った経験がある、代表の小野公裕さんは人気校の秘訣についてこう話す。

「農業の人材育成がベースにあることが大きい。ここでパソコンの職業訓練をしていたら、今の形にはなっていなかった」

小野さんは自らの経験から、職業

訓練施設の開業を決意。状況調査のため県内のハローワークに足を運んだ際、気づいたことがある。

それは農業の正社員の求人の多さ、失業者の年齢層の高さだ。当時の発見が、たからべ森の学校の開校につながり、現在にまで至る。

この地で、失業を経験したからこそ生まれた、鹿児島県ならではの農業人材育成ビジネスである。

● ビジネスを超える 育成の場

鹿児島県の育成ビジネスは地域の特性を売りにしているだけではない。慣習がないなら、つくるビジネスも存在する。

「日本のスポーツは学校を卒業したら、スポーツができる環境がない。地域の中で、年代を超えて、スポーツ



「たからべ森の学校」校舎風景

自体が財源を生み出せる、自立したスポーツスタイルが必要だ」

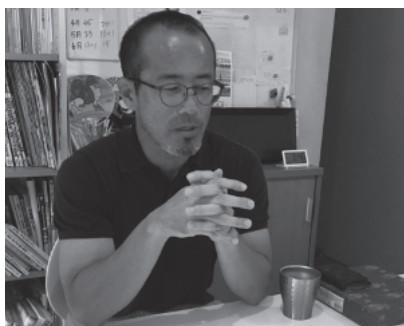
そう熱く語るのは、鹿児島県でNPO法人SCC(Sports Communication Circle)を創設し、現在は理事長として組織をまとめる太田敬介さんである。

学生時代は陸上競技に没頭し、100m10秒46という全国レベルの自己最高記録をもつ。

かつて勤務していた会社の陸上部がバブル崩壊の余波を受け、オリンピック目前に、突如廃部を宣告された。企業や学校が予算を持ち、そこにぶら下がっているだけのスポーツが、いかに脆弱であるかを痛感した。

そこで、自らを鼓舞するかのようになり、2000年のオリンピックイヤー、スポーツが自主財源をもつ、自立したスポーツスタイルである『SCC』を設立した。

フィットネスクラブとの違いについて太田さんは、



笑顔で熱く語るSCC理事長の太田さん

「スポーツという商品をお金で交換するだけじゃない。一生関わっていける良質なコミュニティ=『SCCファミリー』を作っていきたい」と話した。

過去には、オリンピック選手を輩出、さらには様々なイベントの企画運営までも手掛けるSCC。

昨年は参加費1500円の『50メートル走ダッシュ王選手権』を開催。

「普通こんな費用払わないでしょ? (笑) でも、それだけ自信のあるイベントの証拠」とお茶目に、でも力強く語った。

立ち上げ当初は、スポーツ指導に代金を支払う価値基準がまだまだ低かったという。そんな中、ビジネスの領域を超え、地域に新たなコミュニティを構築した。廃部を宣告され、居場所を失った過去の自分。地域の人たちの居場所を守り続けるため、彼は次なるリーダーの育成に目を向けている。

● 終わりのない 人材育成ビジネス

一方、人材育成をビジネスとして確立するには依然、課題が残る。

鹿児島県で人材育成事業を行う株式会社マチトビラは、過去に学生

向けに長期実践型インターンシップ『鹿児島起業家留学』を実施。企業や地域の経営課題の後押しとなる人材を、インターンシップの中で育てる仕組みだ。実際に学生が課題解決に携わり、企業同士のコラボレーションにつながった例もある。ところが、採算が取れなくなり、現在は行っていない。

人材育成をビジネスとして確立しつつ、地域のためになること。それがマチトビラの今後の課題である。

教育には終わりが無い。いまや教育に投資をするのが普通の時代となった。人が教育にお金をつぎ込むなら、学び・育成の場所や人材育成ビジネスは今後さらに拡大するはずである。

同時に、学び続けることも同様だ。学びにも終わりはない。ありったけのお金も時間もかけていいと私は思う。つぎ込むお金も時間もなかったら?

“学びたい”と強く思い続けること。その気持ちが、教育につぎ込むべき最も重要な財なのである。

しかし、教育の現場はまだまだ飽和状態には程遠い。一度学ぶことを諦めた人、放棄した人、そんな人たちが“学びたい”と思った時に、その財をつぎ込むことができる受け皿の確保が急務である。

人材育成市場はビジネスの宝庫だ。鹿児島の教育の現場で、終わりのないビジネスへの挑戦はまだ始まったばかりである。

Queen of

100m障害

走り高跳び

砲丸投げ

200m

七種競技をもっと

株式会社アトレ ヘンプヒル恵選手 入社内定記者会見



フォトセッションでのヘンプヒル恵選手、右は石司会長

走り幅跳び

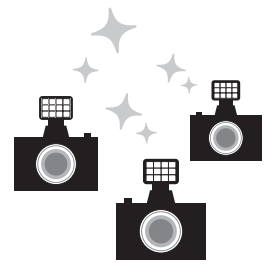
やり投げ

800m

athlete

メジャーにしたい

学生チャンピオン
へんぷ^{めぐ}ヒル恵さん



駅ビル運営「アトレ」採用会見

文&写真 学生記者 田村律子 (法学部4年)

2日間で7種目を競う陸上競技七種競技の学生チャンピオンで、日本歴代2位の記録を持つへんぷヒル恵選手(文学部4年)が株式会社アトレに入社することが決まり、昨年12月3日、東京都内で入社内定記者会見を開いた。

フランス語で「魅力」を意味するアトレはJR東日本グループで、恵比寿・吉祥寺などで駅ビル型を中心としたショッピングセンターの開発と運営などを手掛けているが、これまで陸上競技部はなかった。

採用までの経緯を石司次男取締役会長は「オリンピックに社員が出場すると、とっても楽しいな、というのがスタート」と笑顔で語った。

へんぷヒル恵選手が高い志を持って世界で戦える選手になること、七種競技をさらにメジャーにすること、同選手の活躍によって社員らが活性化することを目的としている。

壇上で緊張した表情の同選手は「ファッション界と陸上競技、生きている世界は違いますが、新しい挑戦に取り組もうという姿勢に感銘を受けました。自分の可能性を最大限に

□ 会見に12社13人

高校時代から積み上げた全国大会の優勝8回。卒業後の進路が決まった注目選手の会見に12社13人のメディアが集まった。

一般紙、スポーツ紙、陸上競技専門誌のほか交通関係、繊維関係も。会見がスポーツ&ファッションの融合とあってスポーツのフィールドを超えていた。

引き出せると考えています」と決意表明。

この日のドレスアップはアトレ直営店「クチュリーフ」によるもので、注目度がさらに増した。

ファッション×スポーツ

走って、跳んで、投げて—七種競技の勝者は「クイーン オブ アスリート」と呼ばれ、国際舞台では大いに称賛される。

国内の競技人口はまだまだ少なく大会出場(エントリー)選手は、日本一を決める日本選手権混成競技(昨年6月)で35人。男子の十種競技で57人だ。女子選手は大学レベルで30人ほど。1人で複数種目に挑むのは難しいとされている。

七種競技をもっとメジャーにするため、同社は「スポーツ×ファッション」という新しい考え方を示した。

再び石司会長が語る。

「メジャーにしていくためにはス

ター選手が必要。ヘンプヒル選手には華がある。華のある選手が強くなることが、七種競技をメジャーにする。スポーツは『強さ』に価値がある、強さのなかに美しさや楽しさ、そういったものを織り込んでいきたい」

ヘンプヒル選手も呼応して、「ファッションと陸上競技を掛け合わせるというのは自分にとって新しい考えです。選手を美しく見せることで、選手も高い自覚を持ってさらに上へいけます。皆さんに興味を持って頂けるのでは」と続けた。

新たなトレーニングに、手応え

2018年シーズンは左脚に大けがを負って、長く苦しんだという。

「全力を出しているつもりが、結局は今までの8割ぐらいしか出せていない。勝っている自分を想像できなかった」

このとき転機を迎えた。練習内容

や考え方など従来方針を変えることで、今までの自分を超越することができると確信しつつある。

十種競技に精通した元順天堂大コーチの林田章紀氏に指導を仰いでいる。同コーチは国際トップレベル選手の指導実績があり、陸上競技の普及活動にも取り組む。

林田コーチとの練習を「自分がほとんどできないことばかりですが、毎日がすごく新鮮です」と、ほほ笑んだ。筋力トレーニング、逆立ち、鉄棒など。競技に直結するというより、体の使い方を学んでいる。

「今までは走り込み練習が多く、フィジカル的な筋力トレーニングが少なかった。筋力トレは走りの中でしていたつもりでも基礎がしっかりと作れなかった。けがをしないうるにも、筋力トレが必要だと感じています」

今の練習に、確かな手応えを感じているようだ。



七種競技/ 走って 跳んで 投げて

第1日

10:00 100m障害
11:00 走り高跳び
13:30 砲丸投げ
16:30 200m

第2日

09:00 走り幅跳び
11:45 やり投げ
14:35 800m

(注)上記は一例で、開始時刻は大会によって異なる

大学時代の主な戦績

年	大会名	結果	得点
2015	日本選手権混成競技	優勝	5622
	日本学生選手権(インカレ)	優勝	5448
2016	日本選手権混成競技	優勝	5882
	日本学生選手権(インカレ)	優勝	5547
2017	日本選手権混成競技	優勝	● 5907
	アジア陸上選手権(インド)	銀メダル	5883
2018	日本選手権混成競技	2位	5766
	日本学生選手権(インカレ)	優勝	★ 5550
	アジア大会(ジャカルタ)	6位	5654

●は日本歴代2位、日本学生記録 ★は大会タイ記録

東京オリンピックで 表彰台に

「2019年4月のアジア陸上選手権(ドーハ)に出場することができれば、そこで優勝を目指します。9月の世界選手権(ドーハ)出場も果たしたい」

「2020年に東京オリンピックが控えています。今まで七種競技において、日本人女子選手が誰も到達することができなかった表彰台からの眺めを最初に目にするのは私でありたい」

中学生で始めた陸上競技。高校時代には日本ジュニア記録を、中大時代には日本学生記録(日本歴代2位)樹立と、苦しみながらも着実に壁を乗り越えてきた。得意とするハードル(100㍓障害)は、観衆の目を離させないほどの綺麗なハードリングだ。

そんな彼女に魅せてほしい。



2015年夏号の表紙を飾った

「いつまでも、しなやかに」

アトレの企業理念のように、世界で戦うアスリートとして、
強くありながらも、美しく、しなやかに魅せる
彼女の七種競技を。